

国文学研究資料館蔵田安德川家旧蔵『手習口伝』について

金子 馨

要旨

国文学研究資料館田藩文庫に所蔵される『世尊寺殿口伝^{手習}』（二五―七一六）を翻刻・紹介する。本書の外題には「世尊寺殿口伝」と記されるが、内容は『手習口伝』の増補版である。享和元年（二八〇一）に橋本経亮が書写した『手習口伝』（二五―七一八）も伝来しており、その内容と比較すると、『世尊寺殿口伝』は『手習口伝』に「灌頂七箇条」などを増補している様子が伺える。冒頭に記される内容により高野大師（空海）による「魚養口伝」なるものが藤原教長の目を経て世尊寺家に伝来し、世尊寺十六代・世尊寺行高が書写した入木道伝書と思しい。朝野魚養の口伝か否かは定かではないが、資料を一瞥すると、藤原教長の口伝『才葉抄』に含まれる項目が散見される。いずれにしても、世尊寺流が断絶する頃の伝授の様子が垣間見られる資料であり、世尊寺家や持明院家の伝授内容の享受の様相を考察する上で看過できない資料である。

「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥するかぎり、田藩文庫以外には所蔵が確認できず、現状において貴重な資料といえる。これまで当該資料に関する言及、もしくは研究報告されたものはないため、今後の書論研究に資すると考え、ここに田安德川家旧蔵本の全文を翻刻・紹介したい。『手習口伝』（二五―七一八）等との異同も示す。

一、おぼしめし

国文学研究資料館田藩文庫（田安德川家旧蔵、以後「田藩文庫」と略）に所蔵される『世尊寺殿口伝^{手習}』（一五一七―一六）を翻刻・紹介する。本書の外題には「世尊寺殿口傳」と記されるが、内容は『手習口伝』の増補版である。『手習口伝』の冒頭に記される内容により高野大師（空海、七七四〜八三五）による「魚養口伝」なるものが、藤原教長（一一〇九〜一一八〇？）の目を経て、世尊寺家に伝来したとされる。奥書に署名はないが書写年次や後の奥書等から、世尊寺十六代・世尊寺行高（一四二二〜一四七八）が書写した入木道伝書と思しい。奈良時代の能書・朝野魚養（生没年未詳）の口伝、あるいは空海の関与については信憑性に欠けるが、資料を一瞥すると、藤原教長の口伝『才葉抄¹』に含まれる項目が散見される。いずれにしても、世尊寺家が断絶する頃に書写された伝書のひとつで、世尊寺家や持明院家の伝授内容の享受の様相を考察する上で看過できない資料である。

「日本古典籍総合目録データベース²」を一瞥するかぎり、田藩文庫以外には所蔵が確認できず、現状において貴重な資料といえる。これまで当該資料に関する言及、もしくは研究報告されたものはないため、今後の書論研究に資すると考え、ここに田安德川家旧蔵本の全文を翻刻・紹介したい。なお、田藩文庫には、享和元年（一八〇一）に京都梅宮大社の禰宜で有職故実家の橋本経亮（一七五五〜一八〇五）が書写した『手習口伝』（二五―七一八）も伝来しており、その内容と比較すると、『世尊寺殿口伝』は『手習口伝』に「灌頂七箇条」などを増補している様子が伺える。本稿では広本とみなされる『世尊寺殿口伝』を翻刻・紹介するが、『手習口伝』（七一八）等と重複する部分についてはその異同も示す。

二、本書の書誌・解題

田安德川家旧蔵『手習口伝』、および『世尊寺殿口伝』については、『田藩文庫目録と研究』に書誌情報³⁾が記されているばかりである。本書を翻刻するに伴って、目録掲載の書誌情報と重複する部分もあるが、資料の書誌について簡単に記しておきたい。

『世尊寺殿口伝』(一五―七一六)は、袋綴の写本一冊。寸法は、縦二六・七糎、横一八・九糎。表紙は山吹色の水玉文様の紙表紙で題簽はなく、表紙左肩に「世尊寺殿口傳^{手習} 十一」(外題)と直書きされる。内題は一丁表左端に「世尊寺殿家傳 十一」(扉題)、二丁表右端に「一、手習口傳」(巻首題)とそれぞれ記される。本文料紙は薄様斐紙、全十丁(墨付九丁、巻末に遊紙一丁)。本文は漢字カタカナ交じり文で書かれている。各本文末に本奥書が記されており、『手習口伝』の後には、「正文元年丙戌卯月上幹日書寫之」と記される(行高か)。増補部分の後には、持明院基春(一四五六―一五三五)が、大永六年(一五二六)に行高卿自筆本を以て書写した様子が窺える。増補部分含めて行高自筆本に記されていたかは判断しがたい。「灌頂伝受」七箇条の後には、年季や書写者は記されていないが、行季自筆本を書写している旨が記されており、奥書を信ずれば「灌頂七ヶ条」は世尊寺行季(一四七六―一五三二)によるものか。最後に、巻末には「永正二年冬十月日 参議藤末葉(花押)」と本奥書が記されている。持明院基春が行季模写本を永正二年(一五〇五)に書写している様子が窺える。奥書の時系列が不自然であるため、永正二年の奥書は他本ものを転写したものと考えるのが自然であろうか。あるいは、増補部分の奥書が中間に取り込まれた可能性もある。本書の書写奥書は確認できず、旧蔵者(松平定国か)の手によるものか、田安家の手によるものか定かではな

いが、江戸時代中期以降の書写と思われる。

『手習口伝』(一五―七二八)は、袋綴の写本一冊。寸法は、縦二六・七糎、横一九・一糎。表紙は白地に、上下藍の打曇の紙表紙。題簽はなく、表紙左肩に「手習口傳世尊寺十三」(外題)と直書きされる。内題は一丁表左端に「秘

手習口傳」(扉題)、二丁表右端に「手習口傳」(巻首題)とそれぞれ記される。本文料紙は薄様斐紙、全十丁(遊紙はない)。本文は漢字カタカナ交じり文で書かれている。本文末に、「本云文正元年丙戌卯月上幹日書写之」との本奥書が記される他、巻末には、『世尊寺殿口伝』(七一六)と同じ「右一帖者世尊寺侍従行季模写之尤入木道之龜鑑吁可謂鴻寶者歟可禁外見而已 永正二年冬十月日 参議藤原末葉(花押)」との本奥書が記される。巻末に「享和改元歳九月写之 経亮同月校字 誤写模写字本ノ、ニセナリ」と、書写奥書と藤原教長に関する注が確認される。書写奥書によれば、享和

元年(一八〇二)に京都梅宮大社の禰宜で有職故実家の橋本経亮(一七五五―一八〇五)が書写したとする。本書はその写しか。本文の行間や頭部に朱書きで「亮云」と経亮の注が付される。⁵⁾

両本ともに田安德川家の旧蔵で、『世尊寺殿口伝』は二丁表、それぞれ右上に「田安府芸台印」(正方・朱文・篆書、B)、右下に「献英楼圖書記」(長方・朱文・篆書、C)の二顆が捺される。⁶⁾

三、本書の内容について

本書は、冒頭の内容や巻末の本奥書より、空海の著作とされる「魚養口伝」を世尊寺行高が書写したものと思しい。朝野魚養の口伝か空海の著したものかは定かではなく、仮託されたものと考えるのが無難であろう。また、藤原教長の目を経て、世尊家に伝授・伝来したものとすることが確証はない。しかし、教長の口伝を記した『才葉抄』の内容と重

複する項目が散見される点に注意したい。ただし、『才葉抄』の後半部分は後世の加筆とされており、教長との関連も慎重に判断する必要性がある。いずれにしても、世尊寺行高によって文正元年に書写された本書が、持明院流の祖とされる持明院基春に継承され、さらに世尊寺十七代、世尊寺行季へ伝わっていることが奥書の内容から読み取れる。ゆえに、世尊寺家や持明院家の伝授内容の享受の様相がうかがえる資料のひとつと言えよう。なお、『才葉抄』などの入木道伝書とどのように連関するかは後述する。

記されている口伝の内容は、『手習口伝』は手習双紙の事から始まり、文字の造形に関することや手習をする時の心構え、道具に関する注意事項が列記される。最後に空海が作ったとされる仮名九字について追記され、計十五項目が一つ書き形式で記されている。

それに、「又追而書加之」として、屏風・障子書様、書壁事、書板様、像讚書様、外題事、経外題事、一品経事、願文勸進帳同之、咒願文、色紙形、草子事、繪詞事、扇物書様、消息之事、手習様、依真行草取筆様、字躰事、硯善悪事、同安置様の二十項目が増補される。奥書によれば、ここまでが行高自筆本には記されていたと考えて良いだろうか。増補部分は、『入木篇目集追加』（「世尊寺侍従行季二十ヶ條追加」とも、『統群書類従』雑部に収載）の内容に項目立てや内容が合致する。『入木篇目集追加』は、世尊寺行尹（二二八六～一三五〇）の撰したものである。編述者には、奥書寺行房（？～一三三七）の『右筆条々』より、肝要と思しい二十ヶ條を抜き書きしたものである。編述者には、奥書の内容から行高・行季・行忠などがあてられる場合もある。本書の奥書は世尊寺行尹（二二八六～一三五〇）自筆本を以て書写したとされる。田藩文庫にも所蔵されるため（『入木篇目集追加』一五―七二⁷）、後の翻刻では該当部分の異同も示したい。

さらに、「灌頂伝受七ヶ條」が増補されており、奥書に行季模写本に記されていたとされることから、奥書の内容を

信ずれば行季が加筆した可能性も考えられるであろう。「灌頂伝受七ヶ条」は森尹祥（一七四〇～九八）著『入木道伝書目録』⁸⁾などにも掲載される。

四、翻刻

【凡例】

- 一、人間文化研究機構 国文学研究資料館（田藩文庫、田安德川家旧蔵）に所蔵される『世尊寺殿口伝^{手習}』（一五―七一六）を翻刻する。校本作成に伴っては、『世尊寺殿口伝』（七一六）を底本として、対校本に同館所蔵『手習口伝』（二五―七二八）を用いた。増補部分の校合には同館所蔵『入木篇目集追加』（一五―七二五）を用いた。
- 一、可能な限り原本に忠実に翻刻するようにつとめ、改行についても底本通りとした。
- 一、平仮名・片仮名は、現行の字体に統一した。
- 一、繰り返し記号（踊り字）は、片仮名は「ヽ」、漢字は「々」、それぞれ二字以上の繰り返しは「〈 〉」、あるいは「々々」で示した。
- 一、底本に存する校異・付訓・注記などの類は、可能な限り原本にしたがつて忠実に示した。補入は本文の括弧内に記した。修正は本文右傍に修正前の文字を括弧内に示した。
- 一、朱の書き入れは、冒頭に「〈朱〉」と付した。また、全丁にわたって朱の句点や中点、傍線や文字囲いが付されるため、本稿においても可能な限り忠実に示すよう努めたが、煩雑さを避けるため黒字で示した。なお、傍線は校本作成の都合上、傍線（太一重線）を該当部に付した。

一、誤写と想定される箇所や不審な箇所には、「(ママ)」を付した。

一、頁移りを「」で区切り、その下に丁数をアラビア数字、「表・裏」を「オ・ウ」でそれぞれ示した。

一、各項目の頭部に通し番号をアラビア数字で示した。

一、校異の掲出は、相違する箇所に傍線・丸数字を付し、各項目下段に「校異」として示した。数字は各項目毎に分けて、通し番号を付した。

一、漢字の新字・旧字・異体字、平仮名と片仮名や仮名遣いの相違の類は掲出から省略した。

一、漢字・仮名の別、例えば「也↓なり」の類は、掲出から省いた。ただし、読みが複数該当するもの、例えば「様↓さま・やう」の類は掲出した。

一、「侍↑↓侍る」や「世中↑↓世の中」などの送りがなの表記の相異は掲出を省略した。ただし、送りがなに相異が見られる場合は掲出した。

【翻刻】

【校異】

①世尊寺殿家傳 十一

「 1丁オ

①秘手習口傳

「 1丁ウ

1一、手習口傳

高野大師 魚養口傳委細ノ記ハ石蔵ニイタク秘シテ籠

①拂

ラレタリ安元三年七月七日或僧虫①掃ノ便ヲ得テ隱密

②必本本ノママ

ニシテ書記ス宰相入道教長ニ見セシムルニ^②秘本也トテ寫之此口傳家々ニ傳ル也

2 一、手習双紙ハ^①相構々々^②能キ帋ヲフツクリテ其二習フヘキ

ナリ其故ハ習始ルヨリ双紙ヲ目ハカリニテ文字ノ座ヲス

クニ可習事也筆訓ツモリヌレハスキ^③計ノナキ物ニモスクニ

書ル、也 (本 目ハカリ目分量ノコト歟)

〔函〕懸針 ^④真行草ニ通ス筆ニハ^⑤少シ心アリ^⑥大旨スカタハカリノ様也

此スカタ下^⑦針ノサキノ躰ナルヘシ (本 サゲヘリ)

〔函〕落露 是ハ文字ニヨルヘキ也小キ文字ニハナシ

大ナル^⑧文字ニカクヘシ

〔函〕垂露 是ハ普通ニモ

^⑨可書也

〔函〕遍鵲 是ハ^⑩諸ノ文字ニ

^⑪可書也 六點 ^⑫次第名

3 一、廻鸞遺遺遺魚鱗虎爪頭中^⑬内空^⑭緻救翳醫師

福盛左短右長立太横次大點小點飛鳥^⑮竹葉文龍水

〔本〕人立^⑯示^⑰乙^⑱盆篇寶珠蓬頭山帶雲頭

摺筆 脩書 抑書 貫花^⑲ 筆ヲ取筆ヲ取サル様
マリノ足藤花ノ心

┌ 2丁才

① 本ノマツ 相指云々

② 能キ紙ニテ

③ 信草行ニ

④ チト心アリ

⑤ 大スカタハカリノ

⑥ カクヘシ

⑦ 書ヘキ也

⑧ 諸文字ニ

⑨ 書ヘキ也

⑩ 尔

⑪ 筆ヲ取筆ヲ取サル様
マリノ足藤花

4一、繩廳—定 風 廻 乱 乱水 是等ノ筆筋行草ハ皆如

レ此也是ハ龍蟠ノスガタナルヘキナリ

5一、散帶—分 則 遠 是ハ廻鸞ノ躰ナル文字也

凡手跡ヲ好ニハ先筆ヲ持ヘキ者也ユルノトサシノヒタル筆

ニテ、墨ヲタフノトソメテ、書ヘキ也、ヲヨキタル筆ニテ、ツフラ

カナル筆ニテ、書タル文字ノ様ニ、カ、ントスル也、是ハ龍蟠 飛

鳥廻乱ノ點ヲタニモ習書ナレハ自然ニツヨラカナル筆ニテ

書タル文字ノ躰ニナル也

6一、手跡ニ付テ、種々ニ品アリ、筆フトニテツヨカルヘキ様、又筆細ノ

ニテヨキ事アルヘシ、書様ハ信ナレトモ、行草ノ筆筋アルヘキ

也又行草ナレトモ、筆筋ハ真ノモノニテアルヘキ也、然トモ手

書ハ、カキ物ニヨリテ、心エテ書カフル事ナリ、此等ノチカヒメモ

能々ナラヒ心得ヌレハ、ホトナク手跡モ、イテキヌ、筆モ、ウルハ

シク、シタ、マル也、

7一、手習ヲスヘキ様、手本ヲ一返、大方ノ文字コトニ、習ヒタ、ノ

昏ヲ、手本ノヤウニ、フツクリテ、書寫シテ、見合スヘキ也、書寫

ス時モ、筆ヲオサヘテ、ネハク、能々手本ニ、見合テ、可書也サテ

常ニ、手本ニ見合テ、善キ悪キ、文字ノ長短、^②文字ノ長短、^③ヨリノキ

— 2 丁ウ

① ツフラカナル

① 筆ホソニテ

② 信ノモノニテ

① 書ヘキ也

② 文字ヲ長短

③ ヨリノキ

カライテ、可習也、如此常ニカケハ、大意モ心エヌレハ、萬ノ文字、自然ニシテ、ヤカテ行ヲ、直ニ被_レ書故實ニテ、在ナリ

8一、手習スルニ、物クサキ時ハ、不_レ可_レ習也、心ノイサマシク、オホユル時

習ヘハ、文字ノ躰モ心ニウカヒ、時常ニ筆ヲ取テ習ヘキ也、習ニ

ナラヒニクキ文字ヲハ、指置テ、我心ニ似セント思ハレテ、似セヤ

「 3 丁オ

スカランヲ、可_レ習也、又ニセニクカラン文字ヲ、左右ナクニセント習

事スヘカラス、其文字ヲハサシヲキテ、心ニ習ヤスク、思フ字ヲ、

奥端クリテ、可_レ習也、如此スレハ、習ニクカリツル文字モ、此筆

訓ニテ、安ク似ル事也、^①葉ヲステ、^②肝要ヲセムトスヘキ者ナリ、

枝葉ヲスツヘキト云事ハ、或ハ點ヲアマリニ片寄テ、文字スカ

タ、篇内ノ躰ヲナシカラス、長短ヲ書テ、ヨリノキヲ目ハヤリヲ

シテ、書コト也、^③能_レ々手ノ却タニツミテ、ウルハシク、筆ノシナモ習テ

後ニ、勢ヲワカス事、能書ノミナ法也、筆ツノリテ後ハ、クセムニ付

テモ、キシ入リタル^④筋ミエテ、面白キ事也、其ヲ左右ナク、初心ノ

時ヨリ筆ヲ^⑤振クセシヲ^⑥先タテ、^⑦書ツケタレハ、筆アラクナリ

テ、クルフ事ニテ有之

9一、文字ノヲヨリハ、十八道得ルモアリ、カタク持スル事マレナルニヨ

リテ、十八ヲアツメテナシトヨメル也、三千界無計、平等ナル間、

① 葉クステ、

② 肝要ヲムトスヘキ

③ 能_レ々

④ 筋ミヘテ

⑤ 振クセミヲ

⑥ 先タテ

⑦ 書ツケヌレハ

① 大ナリト

10 一、文字カサナル文字ハ、①タカ、ル也並(朱)フ文字ハヒロコルヘキ者也、

(朱)ナラフカサナル
鷗 豊

— 3 丁ウ

(朱)カサナルナラフ
膏 額 凡文字ヲカクニ、心得テ書ヘキ也

11 一、手跡ヲ習ニハ、手本ニ筆カスノ入タル文字、篇内習ワツラハシ

キヲハ、作卜篇トヲ、二度ニ習ヘキ也、此義口傳也、凡習ニクキ

文字ヲハ、一字ナレトモ、一點ツ、モ、アマタニ取ハナシテ、習ヘキ

者也、ヒトヘニ安キコソアレ、心ニ似セニクキ、文字ヲハ、①少ツ、習

テ、座ヲカサネテ、後ニカキ習ニヤスキ事也、如此タニモ習ヘハ、

文字ノ習ヤスキノミニアラス、筆ツカヒモオホエ、文字ノヨキ

事ニテ有也、手跡モワカ涯分ヲハカラヒテ、書ヘキ事也、手

本ノ數タニモアマタ持テ、ミサハクリヌレハ、知恵ツク事也、手

跡ホトナクアカル也、我好ムミチナラネハト、思事アルヘカラ

ス、何モ皆ソノシナルヘキ物ナレハ、アマタノフリニヨリテ、面白

キスチアルヘキ也、何ノフリナリトモ相構々々モツヘキ事ナク

12 一、手習ヲスルニ、心ニ今ハ似タリ、我ハ能書也ト思ヒテ、手本ヲ

打ステ、アル事アルヘカラス、手跡ノ損スル事也、又内々ウツシ

書ナトスル時スカタ似タリトオホユル文字ヲハ、①手本ノヲクワ

— 4 丁オ

①タ、カ、ル也

①チトツ、

①手本ヲクワクリテ

②カキニスヘシ

クリテ、其ヲ尋見ハカラヒテ、書ヘキ事ニテアル也、一日ハ習ヒ、一日ハウツシ、^②カキラスヘシ、如此習ヌレハヤカテ又文字ツ、キモオホエテ字ナラヒモヨクナルヘキ也

13 一、手跡若シタ、ノ物ヲ書、相構々々、卒尔ニ書事アルヘカラス、閑ナルトコロニテ、心ヲシツメテ習ヒ書事也、人イソキナト云トモ、筆ヲオサヘテ、ネハク筆ヲ立ヌル所、スツル所、ニ心ヲカケテ書ヘキ者也、又物ヲ書ニ卒尔ニテ、書損シタリナト、人コトニ云ヘカラス、卒尔ニテ書損スルト云ハ、未練ノユヘニテ有也、是手跡ノ故實ヲ知サル也、何事モ心ヲソヘテスルト、卒尔ニスルトハ、道カハル事ニテ有也

14 一、料紙ヲコシラフルニ、スキウルシト名付テ、松ヤニヲ、^①小土器ニ一ツハカリニ、ヨキ胡麻ノ油ヲ^②少入テ、能々火ニアタ、メテ、トカシテ、ヨキ料紙一枚ニヌリテ、ヌル時ハ、ホソキ竹ヲワリテ、其上ニヒキハリテ、サテソレヲヨキ水ニ入テ、水ヲハ料紙ノ入ホトノ物ニ入テ、^③今ハカタマリヌラムトオホユルトキ、トリアケテ赤漆ヲ以テ、^④能クスリテ、手習スル事アリ、是ヲスキウルシト名付、手本ノ上ニヲシアツレハ、如法々々文字、スク事ニテアルナリ、ソレヲ書テハ、ヲシノコヒテハ、又^⑤習々スル事也、サテ^⑥墨スラヌ筆

┌ 4丁ウ

- ① 小瓦気ノ
② チト入テ
③ イマタ
④ 能々ヌリテ
⑤ ナラヒノスル事
⑥ 墨ヌラヌ
⑦ 書キノ如シニ
⑧ 習候ヘハ

ニテ、手本ノウヘヲ四五度トモ習テ、又此スキウルシノ昏ニテ、
 ヲアテ、ハ、^⑦書々如此廿日ハカリ^⑧習候得者、其手本ノシナハ
 ヤカテ書ル、事也、相構々々異様ヲステ、スナホニ^⑨習入ヘキ
 者也、夕、常ニ書寫習フ文字ヲ、心ニカケテ、文字ノ躰、手本
 ノ趣ヲオホヘ、ツネニ筆ヲトリテ、書ヘキ事也、手跡ヲ執ス
 ル法ニハ、^⑩寝ル時モ、右ノ手ヲシク事ヲセス、アラク仕事ナカレ、
 手ヲツカヒヌレハ、手跡ニ^⑪筆ノシナ失スル事ニテ有也、能々
 ツ、シムヘキ事也、人ノメツラシカル手本、ウツシモツトキハ、カヤウ
 ニ手本ヲ多ク^⑫持^⑬タル事、私ニイフニアラス本書ノ、**太平御**
覽ニアリ、^⑭ソレニテ最初ハシルナリ、手ヲ好ム法ニハ、文字ノスカ
 タヲホユル時、心ニ面白キ時、墨筆ナキ時ハ、ユヒニテ其字ノ
 躰ヲ、^⑮書寫シテ、晝夜ニ、文字ヲ心ニカケテ、案スル也、何モ手
 書ハ、ソノ品一ツアルヘキ物ナレハ、文字ノ義ニテモ、又筆ノ義
 ニテモ、書キタル物ノ文字、十三義ニモ、ソノ品一ツハ必アルヘキ
 也、常ニ手書ノカキタル物ヲ、心ニ入テ、^⑯見サハクリテ書ヘキ也、
 手跡ヲ執スル法ニハ、物語ノ双昏ナトヲハ、カ、ス^⑰可^⑱双昏ナ
 トヲハ書ク事ナリ、スキウルシノ料紙シタ、ムル様ハ、随分泌
 説ナリ、穴賢々々ヤスク相傳スヘカラス

— 5 丁才

⑨ 習入ヘキ也

⑩ ヌル時モ

⑪ 筆ヲシナ

⑫ 持ユル事

⑬ ソレニ最初ハ

⑭ 書写テ

⑮ 見サハタリテ

15 一、假名事我朝ニ、高野大師御作候、但依「仰事」①住申側字

難者^②て^{天留可良尔色名美}るからに^{名美}いる□み九字必上ノ字ニ可レ續無ニ上

字一者、非「其限」然者乍量上へ不レ續、下へ續下^{（卷ルヲ為レ難、ト}

上ノ字ニ^③自ラ連モ不レ難、又書^{（卷ニ}哥ヲ、四行木立ハ、九七一、二行^{二字}六

七一、二行^{二字}可レ書立石様是也、又二行木立ト申ハ、五七五、一行七

七、一行 書^④藤花様ト云上ヲ^⑤調テ下ヲ不レ同可書也

① 正文元年^{丙戌}卯月上幹日書寫之

又追而書加之

* 本書

① 可レ真也

16 * 本書
17 屏風・障子書様

可レ為二行草字一也上下令二混乱一書レ之於二小字一者見悪也、假

名者又大字者悪也

18 書壁事

大小字并上下者可レ依二字之多少一筆ニ墨多付ハ墨流

下、又少付ハ快不レ被レ書也能々可レ有二斟酌一事也、①至二壁下一之

^{（卷トキ）}時 ハ取直テ、挙二筆管一令レ書也

19 書板様

① 注申側字

② 天留可良尔色名美

③ 目ヲ連モ

④ 藤花様云

⑤ 同書テ

① 本云 正文

* 以下「**」まで『手習口伝』にはナシ

① 可為真也

① 本ノマ、主壁下之

聊摺_レ過墨_一可_レ令_レ書矣

20 題像讚書様

不_レ透_二奧端上下_一書_レ之字跡者任_レ意也

21 外題事

可_レ為_レ真也但於_二行草_一者可_レ依_二本主所望_一哉表紙ノ押返ノ

ハツレノ程ニ書之紐ノ上ニ可_二書訖_一①但銘ノ字多者紐ノ下ニ

一兩字可_二書下_一也所詮上中下ニ二三ノ_②字不_レ穩_レ紐之様書_レ之

於_二草紙_一者撰集ハ_③端ニ書外題物語ハ_④中央令_レ書也

22 經外題事

觀音經 心經 如_レ此 觀世音經 般若心經 此儀非_二當家之說_一

23 一品經事

經者雖_レ為_二真字_一於_二一品經_一者人々書_レ之間少々可_レ書_一替其跡歟

端ニ三枚者如_レ例可_レ為_二真字_一其次細様、一紙次太様一紙草

半紙、筆細次如_レ例ノ真字一紙、次_二行様、上半分太次_二行、下半分細次_二行、上半分細次_二行、下半分太

①如_レ此半紙、次又一行太様、一行細様、等也、②以_レ此大概可_レ有_二校量_一

奧（卷）ニ偈書_③此儀又、奧偈少者、至忠偈可_レ書_二此跡_一歟

24 願文勸進帳同之

可_レ為_二行之行_一且可_レ守_二拾遺納言中隱跡_一矣端ニ三行、奧ニ三行可

「 6丁ウ

「 6丁オ

①但銘之多者

②紐ニ不穩様ニ

③端ニ書也

④中央ニ令書寫也

①如此半分

②如此（大）概

③此像

①下四五分置也

レ残也上一寸余、①下四五分置レ之但随ニ料帛之高下一令ニ准據一
者也、又随ニ字之多少一紙ニ、何行ト賦宛也、書終（卷ノ）行与ニ年
号一其間置ニ半行一矣

25 咒願文

極真也

26 色紙形

上下奥端可書満之枚數多者其躰少々書替也

27 草子事

於ニ公物一者除ニ表紙付一枚（卷ヲ）并次一枚自ニ第三枚之端ニ書一始一之為ニ漢

字一者①可レ為レ行也

28 繪詞事

可レ為ニ行字一也端可レ置ニ一行一段々皆如レ斯①但除不レ執之時始計

端置ニ一行一歟

29 扇物書様

始一行者上下書ニ満之一次行者、半行書レ之又一行者、上二両
一 7丁才

三字、一行者、下二一兩字、書儀在レ之每レ行書（卷キ）満候へハ、①下寄

合テ見惡也、不レ書ニ懸外之折目一歌者如ニ普通之散（卷シ）書（卷ク）源氏詞

風情者行書融之一行可止半也

①可為行

①但餘不執

①下寄合而者惡也

30 消息之事

可_レ為_二行字_一端置_レ笏之程残_レ之

手習様

初心之時ハ、(朱)ネシコロニ苦_レ可_レ学_二手本_一雖_レ聊不_レ可_レ背_レ之能(朱)ク懸ニ思於入木_ニ

莫_レ移_二心於他事_一(朱)ニ閑(朱)ニ廻_二筆端_一不_レ可_レ有_二疎畧_一自_レ端至_レ奥(朱)ニ何返

①_下不可_レ習_二融_一也枚_一數多者四五枚、如_レ先習_レ之其後不_レ見_レ本暗_ニ△觀本下トアリモ誤タルヘシ

②_{可令書寫}令書与習寫_一更(朱)ニ無(朱)ニハ違目_一以_レ之為_レ極也常_ニ透_テ寫_レ之又_一可_二手本_一

矣(朱)何返モ可習融ナルヘシ

32 依_二真行草_一①取_レ筆様

書_二真物_一之時取_二筆本_一也②堅取_レ之而閑(朱)ニ可_レ令_レ書也行字之時

除_二筆本一寸_一取_レ之草之時_ニ一寸計_一早書_レ之不_レ可_二停滯_一者也

字躰事

真行草共可為 細高也

34 硯善惡事

摺_レ墨之時堅_テ、又合_ニ、墨(朱)モ其水(朱)モ以_レ澄為_レ最也吸入(朱)ヤ又洩者、下

品也、水凝(朱)リ硯同下品也、又硯_ニ水ヲ蛙目_ニ入_テ、経_二三ケ日_一雖_レ聊

不_レ乾_ニ者為_レ最歟硯多者以_二其水之乾分限_一可_レ定_二勝劣_一也

35 同安置様

①下可習融也

②可令習写

①筆執様

②而閑

「 7 丁ウ

可レ入^ニ銀箱^一硯面^ニ不^レ可^レ居^レ灰^一（卷^キヲ清書之後、即洗^レ之^不可^レ用^ニ銅水^一）
入^一也殊^一（卷^キニ至テ堅硯ヲハ清^一（卷^キ所ノ土掘^ニ三尺計^一埋^レ之^経卅ケ日^一可^レ取^一）
出^之^一

①此卅^{（ケ）}ケ条者、故^ニ世尊寺行高卿以^ニ自筆^一寫之彼本
則所持也、③類本之為^一帖奥^ニ寫置者也

大永六年丙戌八月五日、④今日進發旅行也、

⑤急假間落字多端歟

藤〔花押〕

― 8 丁オ

唯授一人灌頂傳受

一、錦御旗

一、武家御旗

一、太上天皇御辞表

一、年中行事障子

一、悠記主基屏風

一、賢聖障子

一、勅額法

以上七ヶ条為入木道極秘

― 8 丁ウ

①此廿ヶ条者

②世尊寺行尹卿

③為類本一帖之奥

④近日進發

⑤急々間

右手習篇目集者、世尊寺侍從行季筆跡也、子

所望之處、写興之者也、是者類書又人にも、為二写遣一者也

又此奥二注付事、入木之道奥儀、七ヶ条大事是也、

相傳之分、随思出、雖置先也、此外条々事者、別二

注付畢、自余事者、執心之人二先中聞候共、輒此

奥書付候事、於子孫、可成心得先歟、七ヶ条之

事也、自然端々之事、淺深用捨、懇望之方江

可申之旨、師匠許之上者、聊可成其覚悟也**

┌ 9 丁才

右一帖者世尊寺侍從行季模写之、

尤入木道之亀鏡、吁可レ謂二鴻寶一

者歟、可レ禁二外見一而已

永正二年冬十月日

参議藤末葉〔花押〕

┌ 9 丁ウ

┌ 10 丁才

┌ 10 丁ウ

五、まとめ

『世尊寺殿口伝』の本文の形態（全体像）、及び『手習口伝』（七一八）・『入木篇目集追加』（七二五）との異同は前項に示した通りである。『世尊寺殿口伝』において、増補が確認される以外は大きな異同は見られないが、『手習口伝』の誤写が目立つ。増補部分の『入木篇目集追加』においても小異に留まるが、奥書に見られる自筆本の書写者が異なる点に注意したい。

さて、『手習口伝』の内容は、前述した通り、手習いする際の注意事項や文字の結構について述べたものであり、長口伝『才葉抄』との関連性が見られることはすでに指摘した。本書が『才葉抄』などの入木道伝書とどのように連関しているか、その関連性について簡単に言及し、本稿のまとめにかえたい。項目の対照表は、上段に『手習口伝』の項目（冒頭に記される語句）を、下段には連関のある入木道伝書（書論）の書名や項目番号を示した。

【表】『手習口伝』項目一覧、他書論対照表

	『手習口伝』項目	入木道伝書	項目内容
1	一、手習口伝		
2	一、手習双紙ハ		
3	一、廻鷲		
4	一、繩廳		
5	一、散帯	〔才葉抄〕	4 一、墨を筆に

6	一、手跡ニ付テ		
7	一、手習ヲスヘキ様		
8	一、手習スルニ物クサキ時ハ	『才葉抄』	39 一、嬾からん時
9	一、文字ノヲコリハ	『才葉抄』	3 一、文字は一字を
10	一、文字カサナル文字ハ	『才葉抄』	24 一、先物を書には
11	一、手跡をヲ習ニハ		
12	一、手習ヲスルニ	『才葉抄』	34 一、手を習ふには
13	一、文字ヲハ一字ナレトモ		
14	一、手跡若シタ、ノ物ヲ		
15	一、料紙ヲコシラフルニ	『筆法才葉集』、『才葉抄』 『夜鶴庭訓抄』	39 一、手本ヲウツシ習ヲハ 36 一、手本を数多可持也
16	一、仮名事	『金玉積伝集』内 「烏羽玉問答抄」 ^一	問、色紙 <small>ナトニ</small> 歌書様如何

各書論（入木道伝書）との連関は右の項目対照表に示した通りである。随所に『才葉抄』との連関が確認されるが、完全に本文を抜粋しているわけではなく、内容を租借して伝書に取り込んでいる（教長が本伝書を目にしていたのであれば逆というべきか）。本書の冒頭に記される通り、教長が「魚養口伝」なるものを目にしていた可能性は残るが、『才葉抄』の後半部分は後世的な要素が認められるため、増補された部分と考えられている。⁽⁹⁾つまり、『才葉抄』の内容を以て、教長が目したことを後付けしたというべきであろうか。『手習口伝』への教長の関与については、後世の仮託の可能性が高いと思われるが、『才葉抄』成立にも大きな影響を及ぼす問題であるだけに、慎重に判断したい。

なお、これらの伝書の多くは、「家」存続の危機に対し世尊寺家の歴代は、師範家としての優位性を保つべく、書論書の編述¹⁰⁾をしたとも考えられるため、本書も世尊寺家あるいは持明院家が作り上げた伝書の可能性も念頭に置いておかなければならない。

本稿では、『世尊寺殿口伝』の翻刻、及び『手習口伝』との校本を示し、『手習口伝』の位置づけを簡単に行った。今後、内容の精査を進めるとともに、他の世尊寺家の伝書との比較検討も必要といえる。ただし、世尊寺行高から持明院基春を経て、行季へ継承・伝授されたことは奥書から読み取れ、世尊寺家・持明院家の周辺でどのような内容が口授され、世尊寺家の入木道伝書（書論）がどのように享受されたのか、その様相を考える上で、貴重な資料であることは指摘し得たであろう。

〔注〕

- (1) 藤原教長の口伝『才葉抄』は諸所に五十本近くの伝本が所蔵される。これまでの研究では、最善本とされる阪本龍門文庫蔵『宰相入道教長口傳』などの四十七条本系統、国書刊行会編『日本書画苑』所収本などの八十八条本系統、そして内閣文庫や静嘉堂文庫などに伝わる二十四条本系統の三種に大別されることが知られている。
- (2) 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」
(<http://basel.niji.ac.jp/~koten/about.html>)

- (3) 『田藩文庫目録と研究』日本書誌学大系94（青裳堂書店、二〇〇六年）に掲載される内容を以下に転載する。
638 世尊寺殿口伝（世尊寺十二）（せそんじどのくでん） 写一冊

〈称〉（扉題）「世尊寺殿家伝」、（内題）「手習口伝」。

〔奥書〕「右一帖者世尊寺侍従行季模写之、尤入木道之亀鏡呼可謂鳴宝者歟、可禁外見而已 永正二年冬

十月日 参議藤末葉（花押）。二六・六cm×一八・九cm 蔵書印B C 七二六

640 手習口伝（世尊寺十三）（てならいくでん） 写一冊

〔奥書〕「享和改元歳九月写之 経亮」〔右一帖者世尊寺侍従行季模写之、尤入木道之亀鑑呼可謂鴻宝者歟、可禁外見而已 永正二年冬十月日参議藤原末葉（花押）。二六・七cm×一九・一cm 蔵書印B C 七二八

〔4〕卷末に記される教長に関する経亮の注を転載する（〳は改行、筆者補記）。

亮云
宰相入道教長卿ハ筆法才葉集ノ作者ニテノ入木ノ人ナリ額ヲカキ玉フコト東鑑ニモ出タリノ京極摂政諸
實公ノ末流法性寺殿ノ入木ノ師ナリ保元元年七十一才出家法名心蓮同ノ年八月三日配流常陸國

〔5〕『手習口伝』（七一八）に記される経亮の注を以下に転載する。アラビア数字は『世尊寺殿口伝』の項目番号。

2 「手習双紙ハ」 亮云訓ハ馴歟

6 「手跡ニ付テ」 亮云ヨキハヨ、キ歟

8 「手習スルニ」 亮云訓ハ馴歟

9 「文字ノヲコリハ」 亮云尊田親王ヨリ 主上十八道ヲ傳受シ玉フコト門跡譜ニアリ

15 「料紙ヲコシラウルニ」 スキウルシノコト

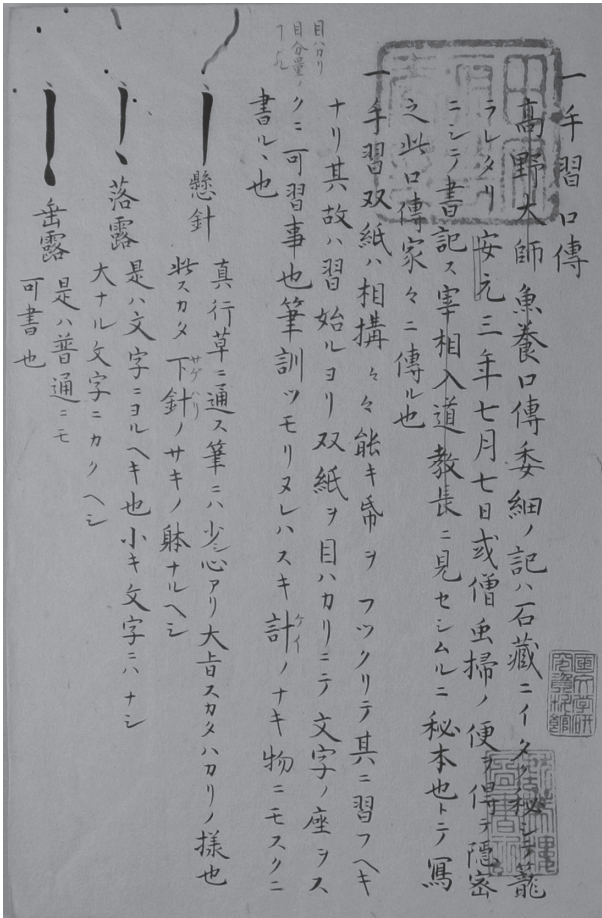
同 亮云可ハ哥歟

〔6〕諸伝本の伝来時期について、鈴木淳氏は「田藩文庫考」（前掲注3に所収）において、捺される蔵書印（「田安府芸台印」が右上に、「猷英楼図書記」が右下）によって、田安德川家三代・斉匡（一七七九〜一八四八）の頃に、田藩文庫へもたらされ、整理收藏（または書写）されたのではないかと指摘する。

- (7) 『田藩文庫目録と研究』日本書誌学大系94(青裳堂書店、二〇〇六年)に掲載される内容を以下に転載する。
648 入木篇目集追加(世尊寺十九)(じゅぼくへんもくしゅうつか) 世尊寺行尹著 写一冊
〔奥書〕「此廿ヶ条者故世尊寺行尹卿以自筆写之、彼本則所持也、為類本一帖之奥写置者也 大永六年丙戌八月五日近日進発旅行也、急々間落字多端也 藤(花押) 飛鳥井雅綱卿也権大納言永禄六年八月廿一日出家」。二六、八cm×一九、〇cm 蔵書印B C 七二五
- 目録掲載の書誌情報の補足として、表紙は白茶色(無紋)の紙表紙、見返しは本文共紙で、料紙は薄様。外題は表紙左肩に「入木篇目集追加世尊寺十九」と直書きされる。内題は「入木篇目集追加世尊寺十九(扉題)」と記されるほか、巻頭に「入木篇目集追加」と確認される。本文は漢字平仮名交じり文。奥書の注記により室町時代の公卿・歌人である飛鳥井雅綱(一四八九〜一五六三)が書写したとするが、花押は持明院基春か。
- (8) 森尹祥(一七四〇〜九八)著『入木道伝書目録』(国書刊行会編『日本書画苑』上、名著刊行会、一九七〇年)、新井榮蔵著『書』の秘伝―入木道の古典を読む』(平凡社、一九九四年)など。
- (9) 近藤康夫「才葉抄と書法伝授」『書論』第一九号(一九八一年秋)、同『才葉抄』書論双書6(日本習字普及協会、一九八二)、阿部倬也『宰相入道口伝』の位置』『愛知大学国文学』第二八号(一九八八年五月)、拙稿『才葉抄』の伝本について―諸本の書誌と各系統の特徴について―』『語文』第一五二輯(二〇一五年六月)、拙稿『才葉抄』類従本系統の伝本について―附校本―』『語文』第一五五輯(二〇一六年六月)など。
- (10) 宮崎肇「中世書流の成立―世尊寺家と世尊寺流―」『鎌倉期社会と史料論 鎌倉遺文研究Ⅲ』(東京堂出版、二〇〇二年)

《付記》

本稿を成すにあたり、人間文化研究機構国文学研究資料館には、資料の閲覧、複写・写真撮影等において便宜を賜りました。また、同館の翻刻に関するご承諾を得て調査を進めることができました。ここに記して深謝申し上げます。



『世尊寺殿口伝手習』(15-716) 巻頭